

## 私の養鶏随想録

加藤 宏光

## 飼養管理について

獣医師は、疾病を中心として学ぶことが多いためであろうか、概して飼養管理には疎い。正直、筆者も家きん試験場に勤務していたかなりの年数、もっぱら伝染性疾患をいかにコントロールするかばかりを考えて過ごした。

当時、家きん試験場をまとめていた故井上哲夫氏（獣医師）は、その頃としては珍しく飼育・管理に関して強い興味を持たれ、鶏ふんを利用した発酵飼料の検討や定温度・定湿度で飼育された鶏のパフォーマンスなど、現在でも興味の尽きないテーマを追跡しておられた。このような姿勢は当時の獣医師としては珍しい。

飼養管理に感性のなかった筆者も、フィールドに密着してさまざまな情報を得て考え、また分析するに従って、製造コストの60～70%にも及ぶ飼料の品質や使いこなしに関する重要性を改めて実感するようになった。

## 飼料の大家、スコット

筆者が農場で生産現場のすべてを学んでいた農場研修の時期に、当時、飼料と家きん栄養学の権威とされていた栄養学者《スコット》の著作に接する機会を得た。500頁を超えるテキストであったが、全体観を得るため通読した。この書物で必須アミノ酸の要求量等の情報を得て、飼料に関する興味が湧いた。

また、初めての訪米で最初に訪れた《カリフォルニア州立養鶏エクステンション・サービス（筆者が最初に勤めた日本の家きん試験場近い）》でいただいた資料には、当時のカリフォルニア

地域の採卵養鶏場向けのブリーフノートに、メチオニン、シスチン、リジン、トリプトファンの一日の必要量について野外における検証データが紹介されていた。

こうした情報を元に、我が国で市販されている飼料中のアミノ酸レベルの実態を検証する必要性を感じた。

## 飼料中のアミノ酸レベル

現場に接する者が持つ感性はどこか似るものか、筆者と同窓（2年後輩）で、養鶏産業のコンサルタントとして道を開拓されていた獣医師の下倉則夫氏が、時を同じくして生産者に飼料中のアミノ酸レベルの共同分析プロジェクトを提案された。

『同じテーマで、複数の場所から生産者へ働きかけることは混乱を招く元になりかねない』そう判断した筆者は、開業時の繁忙もあって、飼料をテーマとする業界への働きかけをいつのまにか棚上げにしていた。

彼のクライアントへのプロジェクト提案に積極的に応じる生産者たちが多く、関東エリアの飼料サンプルが多数集まり、その分析結果を統計処理して、興味あるデータをフィードバックしていたようである。その当時はまだコンピュータが普及しておらず、分析と作表は手作業であったため、下倉氏は、プロジェクト遂行の苦勞をしばしば語ってくれた。

筆者が養鶏臨床獣医師とコンサルタントとして開業して2年も過ぎた頃、ある飼料会社に招聘され、かの《スコット氏》が家きん栄養学の現場への応用を前提としたセミナーで講演した。通訳が不慣れであったためか、内容には満足できる点が少なかったが、そのセミナーの終了時の質疑応答で、下倉氏が必須アミノ酸のひとつ《トリプトファン》の必要量を問いただした。彼の繰り返した分析データの比較対照に拠れば《トリプトファンの必要量はスコット氏の推奨値より15～20mg/日多い方がよいのでは…》というのが下倉氏の質問で、スコット氏はそれに明確な返答を与えなかった。これには後日談がある。

翌年、スコット氏の家きん栄養学テキスト改定版で、トリプトファンの推奨値が従来より15mg/日増え、165mg/日とされていたのである。

その根拠も示されず、オーソリティが自説を簡単に変える（筆者にはそう思えた）。家きん栄養学の成り立ちに疑問を覚えたことで《自分でアミノ酸分析を行いたい。そうすれば、現場で必要に応じたデータが得られ、鶏のコンディションと対比した栄養実態を体感できるのではないか》と感じたのである。

## アミノ酸分析機

下倉氏のアミノ酸レベル比較プロジェクトは5年ほどで終了した。外注で実施するアミノ酸分析コストが非常に高価で、加えて多くのデータを手計算で比較分析して、グラフデータとして配分する作業は大変であり、作業量に対しての対価は予想外に低かったそうである。

筆者がピーピーキューシー研究所（PPQC）を開設した翌々年に、某小規模飼料会社から技術者が転職してきた。フィールドに接する筆者の姿勢に興味をもったそうである。

筆者にとっても、飼料に関する専門家がスタッフに加わるのは大きい。専門知識がさまざまに学べるのである。彼の名前を《浅野広宗》という。一本気で真面目を絵にしたような男であった（もっとも、真面目とは、その真面目さが人格のすべてをカバーするものではないことを教えてくれたのも彼である）。

彼にPPQCに来て何をしたいか、と聞いた。『まず、餌のアミノ酸分析をしたいですね!! それから、飼料の共同設計。それに、鶏ふんの発酵飼料化で牛を飼ってみたいですね』

《夢はでかい方がいい》  
筆者の若い時からの口癖である。  
『じゃー、まずアミノ酸分析からやってみるか!』

そこで、飼料の分析を自前で実施するのに必要な機器類のリストアップと見積もりを始めた。

《とりあえず、2000万円》それが浅野くんの立てたプログラムに従って頼んだ器具・機械の取り扱い業者からの見積もり金額である。小さい金額ではない。しかし、業界への還元金額を考えればバイできないことはない、と筆者は判断した。

『飼料分析および飼料に関わるコンサルテーションで、年間600万円の売上を得れば何とか運営できる』

全体の資金繰りを見渡して、当面の3年間600万円を飼料絡みで売り上げれば、フィールドで共同設計の足掛かりができるであろう。月額50万円である。外注でアミノ酸を分析すれば、1検体で6万5000円もする。サンプル当たりの分析費を4万5000円に設定すれば、粗蛋白質量や水分含量と各種アミノ酸含量を分析した上で、必須アミノ酸の必要量を前提としたチャート図や推奨給餌量を提供するならば、多くの生産者の同意を得られるであろう。月に12～15サンプルの分析が実施できれば目標金額に達するのは難しくはあるまい!

筆者の目算では、当初こそ手間取っても6カ月も経てばルーチン化できるはずであった。

しかし、半年経っても信頼性の乏しいテスト数値が数件上がるだけで、思ったような成果が上がらない。

## 分析費でボーナスを…

筆者は飼料会社からPPQC研究所へ転職してきた技術者（浅野くん）に次世代を任せてみたい、と考えていた。そこで、

『今回の分析プロジェクトで上がる売上がプルするように。それでボーナスを払うことにする』

と告げていた。  
《次世代を任せるのであるから》とのことで当時の銀行通帳もすべて預けて、運営そのものを任せる段取りを組んでいたのである。

ところが、夏までの期間を通して検査実績は月当たり2～4サンプルしかない。彼のたつての要望で分析要員として女性3名を当ててあることを考えても、どうみても賞与が出せるような金を稼げているとは思えない。

『任せたことは任せたこと。途中でとやかく言わずに取りあえず夏までの様子を見よう』

そう心に決めていた筆者が  
『これはダメだ!!』  
と思ったのは、コンピュータプログラムを任せていた別のスタッフの次の言葉による。  
『浅野さんが、今年のボーナスはどうなるんでしょね、と心配してましたヨ!!』

（筆者：(株)ピーピーキューシー代表取締役社長  
／農学博士・獣医師）